

## 令和5年度滋賀県献血推進協議会 議事概要

日 時：令和6年2月5日（月）午後2時00分から午後3時10分

場 所：滋賀県危機管理センター 会議室2

出席者：大岡副会長、越智委員、佐藤委員、柳本委員、三木委員、明石委員、川西委員、石河委員、辻委員、雲根委員、片岡委員

中村幹事、辻幹事

（事務局）川崎課長補佐、橋本主査、岡主任主事、成田主事

（血液センター）杉江事業部長、中河献血推進課長、黒田推進係長

### <議事概要>

#### 1 令和5年度血液事業の実施状況について

- 献血受付者数については、前年と比べて減少しているとのことだが、もう少し長期的な傾向はどうなっているか。また、コロナ下の影響はどうか。
- 献血受付者数については、手元にデータがないが、献血者数では、コロナ下においても大きな落ち込みはなかった。また、近畿ブロックからかなり高い目標を示されているが、概ね達成できている。

#### 2 令和6年度滋賀県献血推進計画（案）および令和6年度若年層献血推進アクションプラン（案）について

- 事務局からは、若年層の献血について、一定の手ごたえがあった旨説明されたが、どのような点でそう感じているか。
- 昨年度、厚生労働省が主催する献血推進調査会で本県の事例を取り上げていただいた。若年層構成比率の順位を上げてきていることを評価いただいたと感じている。
- 昨年度書面開催された協議会で、令和5年度のアクションプランにおいて、目標が若年層構成比率で設定されていたため、実人数にした方がよいのではないかと意見を提出した。令和6年度は実数となっているが、構成比率を重視する理由等はあるのか。
- 別に定める滋賀県保健医療計画で、構成比率を目標としていたため、それと連動してアクションプランの目標設定をしていた。令和6年度は保健医療計画の改定があるため、このタイミングで実人数に切り替えさせていただいた。
- 若年層の人口が減っているので、対象人口のうちどれだけの人が献血してくれたかという率が、献血の意識の向上を評価する指標になるのではないか。
- 献血目標者数は、日本赤十字社近畿ブロック血液センターが設定している人数と連動しているが、こちらは昼間人口などから算出していると伺っている。配付資料にはないが、平成24年では10代の献血率が2.1%となっている。令和4年では4.2%となっている。

- 次回から資料に付け加えていただきたい。もう一点、体育会系の学生に向けて、総体や国体の後に献血を依頼するなど、もう少し具体的にターゲットを絞った活動をしてはどうか。
- 大学の献血では、アメフト部、ラグビー部、ラクロス部など体育会系のクラブに依頼をしている。また、高校献血では、野球部やサッカー部などの顧問の先生に協力依頼をしているところ。今後も引き続き進めてまいりたい。
- 高体連などに働きかけてもよいかもしれない。
- 県と協力して、関係団体に働きかけていきたい。また、立命館守山高校では、献血セミナーの後、どうすればみんなが献血するようになるかということを考え、発表してもらっている。安曇川高校では、看護師や保健師を目指す生徒自らが、学園祭で献血セミナーを実施するので手伝ってほしいという依頼もある。学生が自主的に献血に対する取り組みを進めてきているという実感はある。
- 配付資料では、不採血率が1割強あるが、その主な理由は何か。
- 最も多い理由は、ヘモグロビンの量が足りないというもの。半分以上がこの理由で、後は血圧や服薬などがある。食事と睡眠が重要になるので、セミナーなどで喚起している。
- 今年度の高校献血の実績として、9校と記載があるが、これは少ないのではないか。
- 高校献血は、学校行事との兼ね合いで、1～3月に実施する高校が多い。また、養護教諭の先生によっては、献血に伴う事故などを懸念され、実施を見送られることがある。献血中に起こった出来事については、血液センターで対処するので、県と協力して、その懸念を払拭していきたい。高校生のうちに経験すると、その後継続して献血してくれる確率が高い。できるだけ多くの学校に行きたいと考えている。
- 近所にも献血バスがよく来ており、朝早くから献血者も職員も並んでおられる。とても頑張っておられる。一度献血に来られた若年層の方にリピーターになってもらえるよう、その方法について学生献血推進協議会などに意見を聞ければよいと思う。
- 高校によっては、セミナーは開催できるが献血はできないというところがある。その場合、セミナーで他の会場での献血を呼びかけるなど工夫をしているところ。
- 若年層の献血については、最終的に全国順位を何位にしたいとか、献血率をどれくらい高めたいなどの今後の展開について目指すところはあるのか。
- 献血は年齢制限があるため、毎年一定の人ができなくなっていく。そこを補うために10代、20代に力を入れていきたい。目標に挙げている数値は、滋賀県民の献血者ではなく、滋賀県下での献血者であるため、京都や大阪に通勤・通学している方は計上されていない。県民としては、もう少し多くの方が献血に取り組んでいただいていると認識している。具体的な数値を挙げるのは難しいが、まずは令和6年度の目標を達成できるよう努力していきたい。
- 養護教諭への働きかけというのは、個別に行っているのか。
- 県から実施いただくアンケート結果に基づき、各高校に伺っている。

- 滋賀県医師会では、学校医と養護教諭の研修会を毎年開催しており、ほぼ養護教諭が出席されている。協力させていただくので、そういう場を活用してもらえばよいと思う。
- 大変ありがたい。後ほど御連絡させていただきたい。
  
- 若年層への献血啓発にあたっては、SNSの活用を検討いただいてはどうか。
- 滋賀県学生献血推進協議会のアカウントがあるので、そちらで発信している。血液センターでも、今年度からSNS広告を実施している。
- 次年度の資料には、フォロワー数などを記載してもらえば、感触がわかるので検討いただきたい。
  
- 10代の方の血液と50代、60代の方の血液に違いはあるのか。
- 採血後の血液は10代とか50代とかで分けておらず、使用用途や効果に違いはない。
- 採血された側の回復の速さは若い方が早い。
  
- 滋賀県健康推進員団体では、若者世代向けの事業があり、大学や高校に出向くことがあるので、配布する資料などがあれば御協力させていただく。
  
- 本日の内容を踏まえて、今後の献血事業の推進に役立てていただきたい。